

英国

# 食料・飲料市場成長の原動力となる有機食品

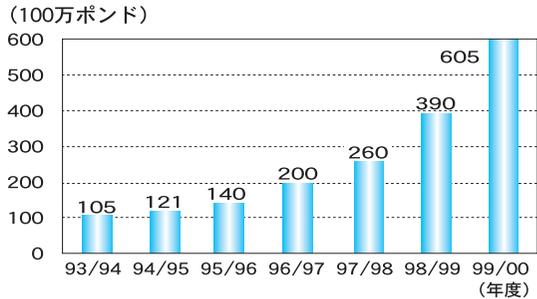
## 狂牛病騒動を契機とした安全志向の高まり

当初、狂牛病は人の健康に害を及ぼすものではないとされてきたが、その後、新クロイツフェルト・ヤコブ病との関連が否定できないとの声明が出されたことにより、英国では一般消費者が食品の安全性に大きな関心を持つようになった。食品に対する安全志向が一気に高まり、有機食品が一般消費者の認知するところとなったのである。有機食品のみを販売するスーパーとして最近ロンドンで人気を博しているプラネット・オーガニックは、狂牛病騒動、ダイオキシン問題、遺伝子組み換え（GMO）食品の排斥運動など食品にまつわる騒動が起きるたびに売り上げが急激に伸びてきたとしている。実際に英国の有機食品市場は、95～96年ごろから年率30～50%の伸びを示しており、最近の急成長ぶりがうかがえる（図1）。

## 拡大する有機食品のマーケット

有機食品市場は、約960億ポンド（1ポ

図1 英国の有機食品市場の推移

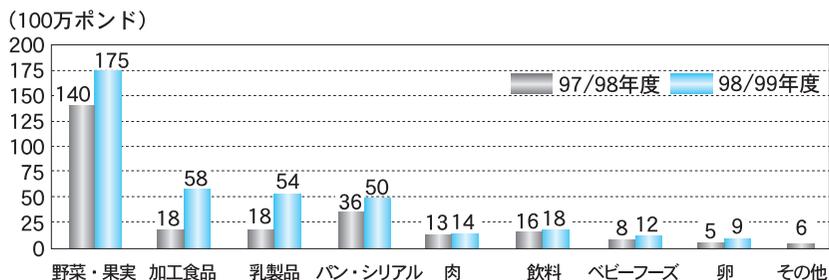


出所：Soil Association

ンド＝約180円）ある食料・飲料品全体の市場と比べると極めて小さいが、近年急激な成長を遂げており、99/00年度（99年4月1日～2000年3月31日）では6億500万ポンドに達したとされている。

これを種類別にみると、98/99年度で、野菜・果実が1億7,500万ポンド（全体の45%）、続いて加工食品が5,800万ポンド（15%）、乳製品が5,400万ポンド（14%）となっている（図2）。特に、加工食品が97/98年度～98/99年度の1年間で3倍以上となったことが特徴的である。これは、市場が広がり、さまざまなタイプの食品が有機農産物を使用して製造されるようになって

図2 有機食品市場の内訳



出所：Soil Association, Leatherhead Food RA



ロンドンで最も人気のある有機食品店、プラネット・オーガニック。斬新なデザインと明るい店内で、一般消費者が気軽に立ち寄れるようになっている

たからだと考えられる。

調査会社レザーヘッドの調べでは、98/99年度にはスーパーマーケットで販売されたものが69%、中小小売店や健康食品専門店が16%、その他の農家や市場などが15%となっている。

### 取り組みを強化する大手スーパー

有機食品市場の急成長に伴い、大手スーパーもその取り扱いを拡大している。現在では、どのスーパーに行っても必ず有機食品コーナーがあり、さまざまな食品が陳列されるようになった。業界最大手のテスコでは700アイテムの有機食品が陳列され、中にはオーガニックコーラなるものもある。また、業界第2位のセインズベリーでは、業界シェアが低下傾向にあることから、昨年より有機食品コーナーの拡張を行い、有機食品の売り上げによりシェア低下に歯止めをかけるもくるみだ。

また、業界第10位のアイスランドは、昨年6月に自社ブランドの冷凍野菜を将来すべて有機農産物に転換すると発表し、業界を驚かせた。同社は98年5月、他社に先駆けて自社ブランドから遺伝子組み換え食品を排除すると宣言するなど、環境団体グリーンピース会員であるマコム・ウォーカ

ー社長の下、環境問題に関心が高いスーパーとしても知られている。同社では、有機農産物に転換したとしても価格は据え置くなど、同じく有機食品に力を入れる他の大手スーパーの大きな脅威になっており、今後の動向が注目されている。

### 生産拡大を急ぐ英国農業

有機食品に対する需要は急速に高まっているものの、これに対応できる国内生産体制は必ずしも整えられていない。

政府は有機農産物の生産拡大のために、94年より従来型の農業から有機農業へ転換する農家に対し財政支援を行っている。しかし、懸命な取り組みにもかかわらず有機農産物への転換は遅れている。有機食品に対する需要を国産で賄うことは不可能となっており、現存の有機食品の70%は輸入品であるといわれている。先に有機農産物への転換を決めたスーパーのアイスランドでも、英国内からの供給を重視するものの、仕入れる有機野菜の8割を輸入に頼らざるを得ず、北米・南米・アフリカ・欧州諸国から輸入することになるだろうとしている。

英国の食料・飲料市場は、年々拡大してきたが、最近では伸び率も年間約3%程度となっている。他方、有機食品市場は00/01年度も7億6,000万ポンドと3割近い伸びが見込まれている。

食料・飲料全体の市場の伸びが鈍化する中、有機食品は絶対額こそまだ小さいものの、数少ない成長分野となっており、大手スーパーのみならず、政府、農業者など食品関係者の大きな注目を集めている分野なのである。